自殺考
——南条あやのために

末木文美士

一　「死に神」に選ばれたとき——『ヒミズ』

古谷実に『ヒミズ』というマンガがある。[1]「ヒミズ」というのは、「日見ず」の意で、『広辞苑』によると、「①（日を見ないで死ぬからいう）ヒミズモグラの別称。②いつも閉じこもって、けっして人前に出ない人。〈日葡〉」とある。ひきこもりの元祖のようなものだ。

主人公は住田。中学三年生。母親と川べりのコンテナの中に住んで、貸しボート屋をやっている。離婚した父親は、ときどき金をせびりに来る。住田の夢は「普通」に生きること。

自分が死ぬと思うか？
「まぁ大丈夫だろう」「まぁ自分じゃないだろう」　健康に恵まれている人ならきっとそう思うはずだ
自分の乗る飛行機が落ちると思うか？
歩道を歩いていたら居眠りトラックがつっこんで来ると思うか？　（……）
不幸ばかりじゃない　幸福もそうだ
宝クジが当たると思うか？　森で3億円拾うと思うか？　自分にとてつもない才能があると思うか？
オレが思うにはそれらは単に運の良し悪しではなく　この世を司る何かによって選ばれた者　そう　「特別

な人間」だ
そんな奴はめったにいない
ほとんどの人間は超極端な幸不幸にあう事なく一生を終える　「普通の人間」
オレは「自分も特別」などと思い込んでいる「普通」の連中のずーずーしいふるまいがどうしても許せん
ぶっ殺してやりたくなる　（一巻、五―七頁）

女優になるとか、マンガ家になるとか、そんな夢を持つ「普通」の中学生が許せない。

オレはここでのんびりボートを貸す　たぶん一生……
ここには大きな幸福はないがきっと大きな災いもないだろう　おれはそれで大満足だ　（一巻、五二頁）

オレはモグラのようにひっそりと暮らすんだ　（……）
教室でオレ　いるかどうかわからない存在だろ？……例えば先生が神か死に神だとする……　オレは先生と
何とか目が合わないよう首を縮めてひっそりとやり過ごすんだ……　（一巻、一〇六頁）

住田の正反対にマンガ家をめざすきいちがいる。

僕が病気で入院してた時　母親がマンガ買って来てくれたんだ　それがすごく面白くって……病気なんて忘れちゃうくらいだったんだ……
だから僕の夢は大人になってそーゆーマンガを描く事なんだ　少しでも楽しい気持ちになってもらうタメにさ　（一巻、六一頁）

きいちは、その夢を一歩一歩実現させてゆく。苦労して描いたそのマンガは賞を取り、雑誌に載せられる。は

たして「特別」といえるほどのマンガ家になれるかどうかは分らない。しかし、それでも「自分も特別」かもしれないと思って、夢を追うほうがよほど「普通」ではないのか。だから、住田も思う。

オレに他人より優れた能力などあるのだろうか？
〝誰にも〟とは言わない……　そこら辺の　連中より多少　優れているモノ……　（一巻、六六頁）

その小さな夢を押し殺して、住田は、せめてひっそりと「普通」に生きたいと思う。そう思うこと自体がもう「普通」ではない。しかし、住田にどのような夢を持つことができただろうか。せめて「普通」でありたいと願いながら、その願いさえもむなしい。ろくでもない母親だったが、その母親まで恋人といっしょに住田を捨てて出て行ってしまう。「自分の乗った飛行機が落ちると思うか？」、誰も思いはしない。「親に捨てられると思うか？」それだって、同じくらい「普通」でないことだ。

学校を休んで新聞配達をして生活費を稼ぐ住田を、またまた「普通でないこと」が襲う。父親の借金六百万円がのしかかってくる。それでものこのこ金をせびりに来た父親を、住田は殴り殺して埋める。どう考えても、「オレはもう普通じゃないぞ……特別な人間だ」（二巻、一一六頁）。

オレは何事にも関わらず……目立たず……静かにやり過ごそうと思っていた
それでも死に神と目が合った
要するに　クズとクズの間に生まれると　そいつもほとんどクズになると……　（三巻、九七頁）

こうして住田の「オマケ人生」が始まる。

……自首もしないし……死にもしない……どうやらオレは……自分が思っていたよりだいぶケチだ……どうせなら……こんなゴミ以下の命でも一度くらいは有効に……できればきいちのように社会のタメに……立派

に使ってみたいと思う……

（二巻、一二九―一三〇頁）

一年間のうちに悪いヤツを見つけ出し、そいつを殺して、家に戻って、大好きなソファで自殺すること――それだけを頼りに、ストイックに「悪いヤツ」を探そうとする。それから後半の話は、もっぱら住田の「悪いヤツ」探しで展開する。いろいろな「悪いヤツ」が住田の目の前を通ってゆく。パチンコで負けると放火していた飯田、女装して仮面を付けて隣の女の子のボーイフレンドを襲った野上、普段は善良で、住田のボート屋の手伝いをしながら、夜になるとストッキングを被って女性にわいせつな行為を強要する塚本などなど。塚本はその「病気」のために、四十九年の人生を棒に振りながら、それでも生きている。

彼らと住田とどこが違うのか。親を殺し、「悪いヤツ」を探し続け、そして自殺しようとする住田も、けっきょくは彼らと同類ではないのか。住田が一所懸命「悪人」を探して罰しようとするのは、自分がそういうクズと違うことを自分に納得させたいだけではないのか。彼らとどこが違うのか。

住田の友達の夜野正三は、スリを繰り返す小悪党だが、イジメを受けていたときに住田に助けられたことから、住田に心酔する。住田の六百万の借金を知った夜野は、悪友の強盗の誘いに乗って殺人につき合わされ、死体遺棄を手伝う羽目になる。それでも、それで密かに住田の借金を返す。夜野は決して「普通」ではないだろう。しかし、それでも彼は零れ落ちそうになりながらも、「普通」の世界に何とか引っかかってやっている。それは彼が思慮深いからではない。そうではなくて、逆に彼が何も考えないからだ。

住田が「悪いヤツ」とも異なり、夜野とも異なるのは、彼があまりに冷静に自らを知りすぎていたからだ。どうやら「この世を司る何か」、それも死に神のほうに選ばれてしまったようだが、それも知らなければ知らないで通ってしまったかもしれない。けれども、彼にはありありと死に神が見えてしまう。見えすぎてしまった不幸――もしかしたら、彼は「普通」の下ではなく、「普通」を超えた「選ばれた者」であったのかもしれない。

そしてもうひとつ、住田を特徴付けるのはそのストイックな倫理観だ。父殺しで堕ちてしまった命を、しかし、「一度くらいは有効に（……）社会のタメに（……）立派に使ってみたい」。そこから徒労のような悪人探しを続ける。むだかもしれない。たぶん意味のない行為だろう。それ自体が「普通」でないことだ。だが、それが彼を

「普通」につなぐわずかの細い線でもある。

同級生の茶沢景子との出会いが、もしかしたら「普通」になれるのではないか、という希望を抱かせる。自首して、罪をつぐなって、もう一度普通の生活を送れるのではないか、茶沢さんとふたりで……。

一瞬　そんな〝普通〟な未来を……　本気で手に入れられるかもしれないと思った
結局……　特別な奴なんて　いないんじゃないか？
死ぬ確率がどうとか　運がいいとか悪いとか
そんなのすべて結果論であって
誰だって　死ぬ時は死ぬ……　どんな金持ちでも……どんなに善人でも……悪人でも
それは明日かもしれないし……　何十年先かもしれない　要はそのときまでに何ができるか……
世界中には　生きたくても生きられない　人達がたくさんいる　比べるんだ……　遠い世界の話じゃない……
……　オレにはまだ　やるべき事があるはずだ……

（四巻、一七六―一七八頁）

これはしごくまっとうな考え方だ。常識的、といって悪ければ、良識的な判断だ。もしその声に従うことができたならば、「普通」の未来への新しい可能性も開けてきたかもしれない。だが、それはやっぱり一瞬の夢だった。最初から気味の悪い姿を見せていた一つ目の怪物は、最後に死に神としての本性を露わにして住田に迫る。

（住田）「……やっぱり……ダメなのか？　どうしても……無理か？」
（死に神）「……決まってるんだ」
（住田）「……そうか……決まってるのか」

（四巻、一六二―一六三頁）

決まっているのならば、しかたない。それならば、受け入れるしかないではないか。住田はピストルを手にする。これは運命論なのであろうか。父親に怒りを感じたとき、そこにコンクリートブロックがあり、死に神に迫ら

れたとき、そこにやくざからもらって放っておいたピストルがあった。それは偶然であろうか、必然であろうか

恐らくそのように問うこと自体、問題をずらしてしまうことになるだろう。「普通」からずれ、滑り落ちてしまうとき、その時、「普通」のまっとうな理屈は通じなくなる。死すべき人間にとって命はどんなに大事か、そして、その命を生かして誰にもしなければならないことがあるではないか——それは正しい。正しいが、その理屈の彼方に「死に神」は立つ。最期まで毅然と住田は闘った。そして最期に死に神の手に自らを委ねたとして、誰が住田を責められようか。

二　剝き出しの死——『完全自殺マニュアル』以後

『ヒミズ』のキーワードは「普通」ということであった。なぜかこの頃、「普通」という言葉をよく見かける。いま手許に「普通」をキーワードとする本が二冊ある。小田晋『本当は「心に怪物を飼う」普通の人たち——人格障害・性障害ハンドブック』（ぶんか社、二〇〇二）と磯部潮『人格障害かもしれない——どうして普通にできないんだろう』（光文社新書、二〇〇三）である。どちらも「人格障害」と関係しているのは偶然ではないであろう。

「人格障害」が大きくクローズアップされたのは、異常ともいえる殺人事件が続発し、犯人たちの精神鑑定をめぐって取り上げられてからだろう。だが、人格障害とは何かというと、なかなか難しいようだ。磯部によれば、「健康な人格」とは、「とりあえずは生活上、職業上においてその人の性格傾向が対人関係の破綻を招来することがない」ことである。したがって、その逆である「病的な人格」とはその逆で、「その人の性格傾向によって、その人自身が社会的、職業的に不利益を被る場合」[2]である。しかし、「「人格」が「健康的」か「病的」かを明確に判断することは、非常に困難である」[3]。

これに対して、もうひとつ「正常な人格」と「異常な人格」という対を設ける。「健康的」「病的」が特定の社会によって大きく制約されるのに対して、「正常」「異常」は「人間としての常識や普遍的無意識」に関わるものであり、「そこから遠く離れ、とても了解できないような行為や言動を行う人」が「異常な人格」であり、「「正常

な人格」とは、「異常」を持たない人を指す」という。[4]

明確な病変があるものではないので、その基準は曖昧であらざるを得ない。とりわけ、「健康」と「病的」は、著者自身その判別の困難を認めている。もちろん実際の障害の判定は、アメリカ精神医学会の制定した規準で、かなりはっきりとできるので、それが曖昧というわけではない。ここで素人がこれ以上精神医学的な問題に首を突っ込むつもりはない。ただ、「普通」かそうでないか、ということを精神医学的に追求すれば、人格障害の問題に行き当たること、そして、「健康的」か「病的」か、つまり、「普通」であるかどうか、ということを判定することは、きわめて微妙で曖昧だ、ということを確認しておけばよい。だからこそ、「普通」の人が「心の中に怪物を飼い」、ちょっとしたことで「どうして普通にできないんだろう」と悩むことになる。

例えば、かつての戦争期であれば、「普通」でないことは、反国家的な態度を取ること、すなわち「非国民」であることであり、「アカ」であることだった。「非国民」「アカ」は、家族ばかりか友人にまで迷惑を及ぼす厄介な存在であり、社会から排除されなければならなかった。

それは政治の問題であり、精神医学的な問題とは次元が異なると言われるかもしれない。だが、「普通」かどうかの判定基準が、政治から精神医学にずれてきたこと自体が注目されることだ。一九七〇年代においてなお、「過激派」から連合赤軍に至る「異常」は、精神医学の領域ではなく、政治の言葉で語られた。共産圏の崩壊で政治の季節が終わり、その後、短い宗教の季節を経る。オウムという「異常」な宗教の犯罪に人々は怯え、高等教育を受けた「普通」の人が、「異常」な犯罪に手を染めたことに驚愕した。宗教の言葉はうさん臭いものとして遠ざけられた。

政治が退けられ、宗教が退けられたとき、何が残るのか。そこには情熱をもって飛び込んでいくべき何ものもない。「オウム以後」は、「終わりなき日常」（宮台真司）[5]として特徴付けられる。ユートピアも終末もやってこない「終わりなき日常」では、個人の人生の問題が、否応なく逃げ場のない形で自己に突きつけられる。生（性・誕生）・老・病・死、それに家族、友人、学校、職場の複雑な人間関係（愛別離苦・怨憎会苦）、さらには増殖する欲望はリストラや自己破産の生活苦に脅かされる（求不得苦）。

何のことはない。何千年も昔の哲人が語った状況とすこしも変わっていないではないか。その間にさまざまな

言葉で語られた「真理」とは一体何だったのか。さまざまな政治や宗教は結局何をもたらしたのか。すべての虚飾がはがされたとき、宴の後のように剝き出しの現実だけが残される。政治の言葉、宗教の言葉をはがされて、人は剝き出しの自分に直面しなければならない。何から逃げ出しても、自分からだけは逃げ出せない。

例えば、「性」の言葉がこれほど剝き出しに語られることがかつてあっただろうか。「コンドーム」などという言葉が、公共の場で語られることはまずなかったのが、エイズの流行に伴い、公共のマスコミはもちろん、小学校においても取り上げられなければならなくなった。あるいは、「勃起障害」（ＥＤ）などという言葉が、大手を振って表の世界で通用するようになると、誰が想像できたであろうか。かつて神秘的な畏れをもって、あるいは密やかな好奇心で語られた「性」が、その隠微さを失った中性的で無機的な言葉として公共世界を闊歩する。だが、その公共性から抜け落ちた「性」は、セクハラや異常として問答無用に排除される。

自殺もまた大きく変わった。その転機となったのは、一九九三年に刊行された鶴見済『完全自殺マニュアル』であった。自殺本といえば、「自殺者のルポ」か「自殺に関する理屈を並べたもの」だった中で、動機など一切問わず、ひたすら「自殺の方法だけが細かく細かく書かれている」カタログ本ともいうべき本書は、これまでなかったものであり、自殺の勧めともいうべきその内容が物議をかもすこととなる。本書の「おわりに」には、本書の基本的な態度がきわめてストレートに言い表されている。

こういう本を書こうと思ったもともとの理由は、「自殺はいけない」っていうよく考えたら何の根拠もないことが、平然と純朴に信じられていて、小学校で先生が生徒に「命の大切さ」なんていうテーマで作文を書かせちゃうような状況が普通にあって、自殺する人は心の弱い人なんてことが平然と言われていることにイヤ気がさしたからってだけの話だ。「強く生きろ」なんてことが平然と言われてる世の中は、閉塞して息苦しい。息苦しくて生き苦しい。だからこういう本を流通させて、「イザとなったら死んじゃえばいい」っていう選択肢を作って、閉塞してどん詰まりの世の中に風穴を開けて風通しを良くして、ちょっとは生きやすくしよう、ってのが本当の狙いだ。

別に「みんな自殺しろ！」なんてつまらないことを言っているわけじゃない。生きたけりゃ勝手に生きれ

ばいいし、死にたければ勝手に死ねばいい。生きるなんて、たぶんその程度のものだ。「生きるなんてどうせくだらない[6]」。

それまでの自殺本といえば、基本的に「自殺はいけません」というお説教的な前提に立っていた。あるいは今でも立っている。それが「普通」の良識だ。柳美里は恐らくもっとも自殺に肯定的な立場に立っていると思われ、その書『自殺』はかなり刺激的な内容で、「自殺を自分の中にプログラムすべきだということ[7]」を説き、自ら「書きたいことを書いたら、自殺をするつもりです[8]」と公言する（『命』以後の柳は、恐らく変わったのではないかと思うが）。しかし、「問題は死ぬことよりも、死んだように生きることだと思います[9]」と、「死んだように生きる」生き方を批判し、つまりは、「ダラダラ生きているのがイヤだから、自殺すると決めて、それまでいきようじゃないか[10]」と「生きる」ほうに重点が置かれていく。それは、「充実して生きよう」というお説教と紙一重、あるいはすでにそのお説教になってしまっている。

それに較べるとき、「生きたけりゃ勝手に生きればいいし、死にたければ勝手に死ねばいい」という『完全自殺マニュアル』の姿勢は一貫している。その「はじめに」を著者は「取ってつけた話」（おわりに）というが、「なんで今自殺なのか」を、宮台の「終わりなき日常」より早く、きわめて的確な時代認識の下に提示している。

> 80年代が終わりそーなころ、〝世界の終わりブーム〟というのがあった。（……）だけど世界は終わらなかった。（……）もっと大きな刺激がほしかったら、本当に世界を終わらせたかったら、あとはもう〝あのこと〟をやってしまうしかないんだ[11]。

鶴見は、「終わりなき日常」を「キーワードは「延々」と「くり返し」だ。延々と続く同じことのくり返し。これが死にたい気持ちを膨らます第1の要素だ[12]」と表現する。そしてまた、「むかし「人ひとりの命は地球より重い」なんて言った裁判官がいた。だけど、これはとんでもない誤解だ。僕たち一人一人が無力で、いてもいなくてもどうでもいい存在で、つまり命が軽いということ。これが死にたい気持ちを膨らます第2の要素[13]」という。

すこし前の時代の自殺を、例えば高野悦子『二十歳の原点』で代表させてみよう。高野は一九六九年六月二四日に二十歳で自殺した。立命館大学に在学中だった。当時はまさに全共闘時代の真只中。とりわけ立命館大学は、有名教授たちの造反辞職など、もっとも大きく揺れた。高野はその中に身を投じ、運動の挫折と失恋が重なる中で死を選ぶ。高野の日記には、何度か自殺未遂のことが現われ、彼女の死が突発的なことではなかったと知られる。リストカットも二回やっている。

しかし、彼女はいつも思索し、反省する。「何故私は自殺をしないのだろうか。権力と闘ったところで、しょせん空しい抵抗にすぎないのではないか。何故生きていくのだろうか。生に対してどんな未練があるというのか」[14]。生きることに意味を見出そうとする。だからこそ、闘争に関わり、アルバイトをし、恋に心を燃やす。いい子で生きてきた自分を鍛えようとする。死の二日前、日記の最後の日付である六月二二日にも、すっかり疲れきりながら、それでもニュースを聞き、「生きている　生きている　生きている／バリケード[15]という腹の中で　友と語るという清涼飲料を飲み／デモとアジ　アジビラ　路上に散乱するアジビラの中で」と詩に歌いこめる。

『完全自殺マニュアル』でも、まだその威勢のいいマニフェストは、「普通」の良識ある社会に対する抵抗の意味が残っている。それが完全に崩壊したところから次の時代が始まるのだ。

三　「いつでもどこでもリストカッター」――南条あや

リストカットをする際は、主に切れ味の良い貝殻印の剃刀を使用していましたが、一風変わったものも使用しました。ハンズ（東急ハンズ）で購入できる使い捨てメス。安いし、カタチが格好いいのでお気に入りです。切れ味もなかなか。とがった刃先を手首にぶっ刺して、皮膚を切り裂きながら引き抜くのは剃刀では味わえないオツなもの。そして時と場所。私は主にやり切れないときに怒りを感じて、どこに怒りをぶつけたら分からない時に切りたくなります。（……）

最近も久しぶりに静脈までとどく深いリストカットをしてしまいました。ゴミ箱に溜まった血をトイレに

捨てに行くとき、クラリとしたり。血液検査の結果、鉄が一〇・二。健康だった血から一気に転落しました。更に手の平なんかもさっくりとね。使い捨てメスで。なかなか深く切れて驚きの手応え。血、血が止まらない……。

うっふふ。これからの長い人生、リストカットをしたい衝動と上手く付き合っていくにあたって、まだまだ修行と薬は手放せないようです。[16]

南条あやの「いつでもどこでもリストカッター」は、最初『別冊宝島』四四五「自殺したい人々」（宝島社、一九九九）に掲載された。そのあっけらかんと乾いたリズミカルな文章で、即物的に自分のリストカットを語る語り口は、衝撃的といってよいほど新鮮なものであった。例えば、これを高野悦子のリストカットのところと較べてみれば、そのことは一目瞭然だ。

カミソリをあてて思いきり引っぱった。赤い血がみるまに滴となっていった。チリ紙でそれを吸いとって左手の人さし指を眺めた。そして傷口の消毒としてマッチの火であぶった。炎の二センチくらい上でも、徐々に我慢のならぬ程に熱くなる。（……）

「おれにだって血も涙もある」という言葉がある。私の肉体に真赤な血が流れているのである。（……）まさに真赤な血の流れそのものが生命なのである。その血はほとばしる生命である。生々しくてへんに美しい。[17]

読んでいて、いささか気恥ずかしくなるくらいまっとうな「普通」の理屈である。その「普通」を最初から飛び越えてしまったようなところから南条は出発している。

「いつでもどこでもリストカッター」は南条の自伝とも言うべきもので、小学校のときにイジメを受け、中学でも同じような目にあいそうになったとき、クラスメイトの同情をひくために最初のリストカットをして以来のリストカット歴と自殺未遂歴が、自らの手で綴られている。南条はこの文章を書いた数日後、一九九九年三月三〇日に一八歳で服薬により死亡した。

リストカットに代表される自傷行為はアメリカでは一九六〇年代から流行しており、ダイアナ妃がカミングアウトしたことで世界的に注目されるようになった。しかし、一九九九年にレベンクロンの『自傷する少女』を邦訳した杵渕幸子・森川那智子が、その「訳者あとがき」で、「「自傷」という言葉は多くの読者にとってなじみのうすい言葉だろうと思います」[18]と書いているように、日本で社会問題化するのは九九年ころからのようである。

リストカットはそれだけでは通常死なないし、動機も自殺を意図していない場合が多い。男性よりも女性に多く、未婚の十代から二十代の女性に多いとされる。境界例（境界性人格障害）に当たり、「分離不安に対する防衛機制」として行われることが多い。すなわち、母親や周囲の人に見捨てられるという不安から、その関心を引こうとするのである[19]。南条の場合、離婚により小さなころから母親がいなかったから、その当たりもう少し屈折しているが（父親との葛藤など）、リストカットの最初の動機は友達から見捨てられたくないということだった。

しかし、リストカットは常習化する。南条はそれを、「リストカットは、私にとって「自分の立場を回復する手段」ではなく、何かの儀式になってしまった[20]」と表現している。リストカットが自己目的化し、高校一年の頃には静脈までカットするようになり、「不健康なリストカットに転向[21]」する。極端に貧血が進むが、貧血の快感を求めて、注射器による採血も行うようになる。他方で、中学生の頃から服薬による自殺未遂も行っており、精神科に受診してから薬物の常用も加速する。オーバードーズ（OD、薬物の大量摂取）はしばしばリストカットと並行する。南条の死は向精神剤の大量摂取によるものだが、貧血によって心臓が弱っていたため、短時間で死に至ったものと考えられている。

南条がその文才を発揮するようになるのは、一九九八年高校三年の五月から町田あかねの主宰する薬系のホームページ上に日記を公開するようになってからであり、死去するまで一年に満たなかった。その間、過激でストレートな日記が評判を呼び、ネットアイドル化して、「南条あやファンクラブ」が結成されるまでになる。それがマスコミの目に触れ、注目されるようになった。それゆえ、南条の活動はネット社会と深く関わっている。死後、その日記の一部（最初の五月二八日の分と一二月以降の分）は「いつでもどこでもリストカッター」や最後の詩とともに、『卒業式まで死にません』（新潮社、二〇〇〇）として出版されたが、日記の全貌は、その他の資料とともに、ネット上に残された。

もともと、南条の高校卒業とともに、町田のサイトから独立し、婚約者の協力で「南条あやの保護室」という独自のサイトを開く予定で、その準備を進めている間に、南条の死を迎えた。死後、婚約者を中心にサイトの整理が行われ、メモリアルサイト「南条あやの保健室」として公開されたが、最近「南条あやの保護室」の名に戻され、南条の父鈴木健司によるサイト「南条あやの墓標」(http://www.nanjouaya.com/)と合併して公開されている。後者には掲示板もあり、リストカッターや自殺願望者の投稿が見られる。

このように、南条の活動はネットと深く結びついている。ここで、ネットと自殺の問題に触れておこう。ネットと自殺の関係が大きく問題とされたのは、一九九八年末から九九年はじめにかけて報道されたドクター・キリコ事件からであった[22]。この事件は、自殺願望の東京の女性に対して、ネット上で知り合った札幌のドクター・キリコを名乗る男性から青酸カリが送られ、それで実際に自殺が行われたというものであった。その後、最近ではネット心中が大きな問題となっている。ネット上で知り合っただけの複数の人間が心中するというもので、とりわけ練炭を燃やした一酸化炭素中毒という方法が多く採られ、若い男女三人という組み合わせが多いが、五四歳と三〇歳の男性同士という例もあり、年齢の幅はかなり広い[23]。韓国でも流行してきているという。

ネットが自殺願望を増幅させたかのように語られるが、自殺の流行は今に限らない。かつて一九三三年には三原山の火口に飛び込んだ自殺者が一年間で千人近くに上り、そのときには山頂ではちあわせした同士が意気投合して飛び降りたような例もあるという[24]。確かにネット心中はネットという新しい手段が使われている点で注目されるが、ネットだけが悪者にされるのは解せないことである。

むしろネットはそれまで発言の機会のなかった人に自由な発言の場を与えたという点で決定的に大きな意味を持つものであった。それまで、個人で日記を付けても、それは公表されるという性格のものではなかった。高野悦子は最期に近いころ、「ノートを書くことの意味」を自らに問い、「このノートこそ唯一の私である」と思い、「誰かにこれをみせ、すべてをみてもらって安楽を得ようかと、何度か思った」が、もう一方でこのノートを燃やそうという考えが浮んで悩んだ[25]。それが死後出版されるということは、少しは考えたことがあったかもしれないが、現実の問題としては想定されていなかっただろう。作家やジャーナリストを除けば、自分の意見を自由に外に向けて発表する場はなかった。

しかし、ネットはその状況を大きく変えた。そこでは、個人の意見はもちろん、まったくプライベートな日記でもきわめて容易に、しかもほぼリアルタイムで不特定多数の人に公開される。それははじめから公開用の文章として書かれ、その意味で純然たる私的な日記とは異なる。しかし、ではよそ行きの公的な文章かというとそうではない。もちろんネット上で公共的な議論がなされることはありうる。例えば、先ごろのアメリカのイラク侵略の際は、国を越えた反戦の連帯がネットを通して実現された。社会的に広く評価されるネットの効用はこの側面である。その面を無視するつもりはない。

しかし、日記のようなプライベートなものの公表はまったく性質が異なる。それはプライベートなものでありながら、同時に公開されることを意図しているという矛盾を持っている。しかも、それは表社会の公共性とは異なり、必ずしも人畜無害のものとは限らない。[26] それゆえ、そのままなまの形では表社会には出にくい。例えば、リストカッターに関するルポはいくつかあるが、しかし、それはリストカッター自身が自発的に表現したなまの声ではなく、ルポライターというフィルターを通さなければならない。ところが、南条は自らの言葉で語る。これは画期的なことである。表社会で差別され、日陰に追いやられた弱者が、自分の言葉で自分を語ることができるようになったということ――たとえどのような欠点があったとしても、ネットがもたらしたこの成果はすべての欠点を補って余りのあるものである。[27]

私的でありつつ公共的であるネットの裏公共性は、従来なかったいくつかの特徴を持つ。ひとつは、ハンドルネームの使用による匿名性である。匿名性は名前に伴う責任の抑圧を軽減し、自由な発言を可能にするが、同時に場合によっては眠っていた欲望を解放し、あるいは増幅することもある。バーチャルな空間は、人間のある一面だけを強調し、他を捨象する。南条（本名は鈴木純）の日記は、薬物系サイトに投稿されたという経緯から、もっぱら薬物とリストカットに集中する。もちろん南条にとってそれが最大の問題であったが、他方では、彼女には高校卒業とともに結婚を約束していた恋人がいた。よく読んでみると彼も登場人物の中にいるようだが、その恋愛感情のようなことには一言も触れられていない。それを捨象するところに彼女の日記は成り立っている。しかし、父親との葛藤はたびたび出てくる。父との関係が彼女の精神状態に大きな影響を持っているからだ。

もうひとつは、視覚的な表現にある。活字表現は同じ大きさの活字が並び、その平板で同質的な文字列の中か

ら読者が自ら判断して読まなければならない。しかし、文字そのものに色や大きさの変化を付けることで、ネットの文字はそれ自体が暴力的なメッセージ性を持つ。例えば、七月三日に大きなリストカットをした翌日七月四日の日記には次のような一節がある（実際は文字の色も異なっている[28]）。

夕食はなんと焼き鳥。

食えねえええええええ！！！！！！
気持ち悪い！！！吐くわい！！

これをただの同じ大きさの文字が並んでいる場合と較べてみれば、その効果はただちに分るだろう。南条の日記はネットの特性を最大限生かし、文字そのものの迫力で迫る。それは理性による判断ではなく、感覚による衝撃に依存した文章なのだ。大事なのは思考ではない。瞬間的な感覚であり、苦痛と快楽であり、好き嫌いであり、衝動なのだ。そして、それがそのまま読者を襲う。

ところで、ネットに登場した高校三年の五月には、南条のリストカットとODはすでに退却不能のところまで進行していた。翌年三月に死去するまで、その一年足らずは南条にとって、恐らく何年分もの人生を生き抜いた

ようなものであっただろう。[29] 四月には担任教師の勧めで精神科に通院が始まり、五月には町田あかねのサイトに登場。以後、ほとんど毎日サイトに発表する日記は、薬物とリストカットとともに、南条の日常を形作ることになる。七月二日、先に引用した「いつでもどこでもリストカッター」に出てくる大きなリストカットにより救急車で運ばれる。入院治療を望み、七月二七日から一〇月二日まで、精神病院の閉鎖病棟に入院。この間、ネット上の日記公開はなかったが、現在は入院レポートとして「南条あやの保健室」で見られる。南条にとって、入院中の生活はむしろ安心だったようで、その中でもリストカットを図ったりするものの、病棟の入院患者たちとの交流をけっこう楽しそうに綴っている。

退院後、ふたたび同じような生活に戻る。リストカットで満足できず、献血にもたびたび行って怪しまれたりもする。年が変わり、二月頃から、さすがにこれまでのエネルギッシュな筆遣いが衰えてくる。二月二二日には、「さて、みなさんに朗報です。いや、訃報かもね。私の病状が進行しています〜♪[30]」と書いている。二月二六日には病院の待合室でリストカット、二七日夜には父とのやり取りから、屋上から飛び降り自殺を図ろうとして大騒ぎとなる。

父親との関係が、彼女の精神的な問題にもっとも深く関わっていることは先に触れたが、今はこの問題に立ち入るつもりはない。ただ、かつて高野悦子が親から独立して生きようとしたのに対して、南条は父親と切り離せない愛憎の混じった共生関係を続ける。[31]「イヤダ。ヤダヨ。機嫌、なおして、普通の父さんに戻ってよ、私悪いことがあったら直すから…[32]」と泣きつき、「好き勝手に生きて、いいんだね。／私じゃ父の心を癒してあげられないんだね。／じゃあ私の存在価値って、何なんだろう／（……）／なら、消えてしまえ[33]」と屋上に走る。

三月十日卒業式。ネットアイドルの卒業に対してテレビの取材も受ける。卒業とともに新しいサイトの開設や、仕事、結婚など、希望の持てそうなことがあったはずなのに、高校という場を離れることが急速に不安を増す。

11日に日付が変わって、私は完全に高校とも完全に分離したような、そんな状況です。

分離してみたら…。怖いのです。

何にもなれない自分が、情けなくて申し訳なくて五体満足の身体を持て余していて、どうしようもない存在

だということに気付いて存在価値が分からなくなりました。
今まで、卒業するという目標に向かってたらたらしながらも突っ走ってきたのが、目標を達成してしまうと、次に何をしていいのか分からなくなってしまいました。
働くのがいいのでしょう。おそらく。
そんな気力もないのです。
所属する何かがないと、私はダメになってしまうようです。[34]
こんな自分を発見したのは初めてです。

これほど正直な不安の告白は、これまでの日記のどこにもない。その後、日記は一六、一七日にあって終わる。死の前日、婚約者に送った四編の詩のひとつは次のようなものだった。[35]

名前なんかいらない
起きなくてはいけない時間に起きて
しなくてはいけない仕事をして
名前を呼ばれるなら
誰にも名前を呼ばれたくない
何もかもを放棄したい
そして私は永遠に眠るために今
沢山の薬を飲んで
サヨウナラをするのです
誰も私の名前を呼ぶことがなくなることが
私の最後の望み

その最期は、「退院したら毎日どーやって生きていったらいーのか」[36]と、精神病院を退院後自殺した山田花子を思い起こさせる。だが、山田が絶対確実な飛び下り自殺を図ったのに対して、南条はカラオケボックスで最期の薬を飲みながらも、なお携帯電話の電源を切っていなかったという。

四　終わりなき日常の底に——南条あや以後

南条は、その病名をはっきりと「パーソナリティの障害」と告げられている。[37]彼女もまた、「普通」からはみ出し、そこから零れ落ちてしまったひとりだ。「普通」から零れ落ちたとき、自殺が最後の救いとなりうるのかどうか。

「普通」と「普通」でないことは今、曖昧化しつつある。しかし、それと同時に、逆に「異常」に対して「普通」を囲い込み、「異常」を排除して、堅固にかたくなに「普通」を守ろうとする傾向も非常に強くなっている。犯罪を犯すような「異常」者は「普通」の世界から排除して当然だ、「普通」の理屈が通用しない者が「普通」の世界でのさばっていることは危険きわまりない、という理屈である。

かつて少年の犯罪が続いたとき、「なぜ人を殺してはいけないのか」ということが、流行のように「識者」の間で語られた。だが、そもそもその問いそのものが奇妙であることは、あまり気づかれなかった。「人を殺してはいけない」という原則は、そもそも「普通」の社会の中でのみ通用することである。第一、戦場でそのような問いは成り立たない。そのような問いが発せられること自体、ひとつには「普通」の世界が危うくなっていること、そして、同時に「人を殺してはいけない」を至上視して「普通」の世界の「倫理」を再編成して守ろうという道徳主義の蔓延を意味する。その「普通」から零れ落ちたらどうすればいいのか。

私は別稿で、この「普通」の領域を、和辻哲郎に従って「人間」という言葉で表した。[38]「人間」とは「人と人の間」であり、そこで倫理が成り立つと同時に、より根底的には、そこでのみ相互に通用する言語が成り立つ。それが公共の言葉である。しかし、その「人間」の領域をはみ出したとき、そのとき人は言葉で語りえないものに直面しなければならなくなる。「語りえぬもの」の重みにひしがれながら、それでもなお語る言葉を捜そうとする

とき、「語りえぬものを語る」という矛盾にまっさかさまに堕ちていくことになる。その矛盾の中で、それでもなお語ろうとする言葉とは何であろうか。南条あやが、若い生命をかけて饒舌なまでに語った言葉は、少なくともその可能性を示しているのではないだろうか。ネットが開く裏公共性の言葉の可能性に、もう少し注目してよいのではないか。

考えてみれば、「異常」を排除した「普通」などありえない。抗菌グッズでどんなに不潔を恐れても、無菌室にでも入らない限り、菌からまったく免れた清潔などありえないのと同じだ。「終わりなき日常」は、まさしくその中に生・老・病・死が突出する「非日常」の世界だ。南条が身をもって示した「非日常」は、他でもない、私たちの「日常」の底にいつでもあるものなのだ。「終わりなき日常」ほどスリルにとんだ「非日常」はない。

南条の死はひとつの完結であっただろうか。ネット上に、半永久的に墓標としてのメモリアルサイトが漂うというのは、いかにもネットの可能性に賭けた南条にふさわしい。半永久的にもかかわらず、同時にそれはいつ消えてしまうか分らないはかなさをもつ。あたかも萩尾望都の『ポーの一族』のバンパイヤたちのような生と死のあわいに漂う無時間的なはかなさだ。

南条以後、リストカットは依然として今日の問題であり続けている。高校生ばかりか、中学生のリストカッターも自分のサイトを持って発言している。[39] それがこれからどうなるのか、早急な結論を出すことなく、見守っていきたい。

(1) 古谷実『ヒミズ』四巻（講談社、二〇〇一―二〇〇二）。以下、本書の引用は、巻数と頁数を本文中に記す。なお、本稿中では、引用文の、「……」は中略ではなく、底本のままであり、中略は「(……)」で示すことにする。

(2) 磯部潮『人格障害かもしれない』（光文社新書、二〇〇三）、二五頁。

(3) 同、三一頁。

(4) 同、二八―二九頁。

(5) 宮台真司『終わりなき日常を生きろ』(筑摩書房、一九九五。ちくま文庫、一九九八)。
(6) 鶴見済『完全自殺マニュアル』(太田出版、一九九三)、一九五頁。
(7) 柳美里『自殺』(文春文庫、一九九九)、五四頁。
(8) 同、六〇頁。
(9) 同、六〇頁。
(10) 同、五九頁。
(11) 鶴見済『完全自殺マニュアル』、三—四頁。
(12) 同、五頁。
(13) 同、六頁。
(14) 高野悦子『二十歳の原点』(新潮文庫、一九七九)、一二二頁。
(15) 同、一九三頁。
(16) 南条あや『卒業式まで死にません』(新潮社、二〇〇〇)、二六—二七頁。
(17) 高野『二十歳の原点』、四〇頁。
(18) レベンクロン『自傷する少女』(杵渕幸子・森川那智子訳、集英社文庫、一九九九)、訳者あとがき、三二〇頁。
(19) 境界例としてのリストカットについての概観としては、eggs.atushiのサイト『境界例と自己愛からの回復』(http://homepage1.nifty.com/eggs/index.html) の該当箇所が適当である。
(20) 南条『卒業式まで死にません』、一九頁。
(21) 同、二二頁。
(22) 与那原恵「ドクター・キリコ事件総括!青酸カリを求めた人々との遭遇!!」(『別冊宝島』四四五「自殺したい人々」、宝島社、一九九九)。
(23) 『ダ・カーポ』五一五号「特集「死」について考える」(二〇〇三)、一五頁。
(24) 鶴見『完全自殺マニュアル』、一二五頁。
(25) 高野『二十歳の原点』、一八六—一八七頁。
(26) リストカッターのルポとして、手許に以下のようなものがある。ロブ@大月『リストカットシンドローム』(ワニブックス、二〇〇〇)、今一生『生きちゃってるし、死なないし——リストカット&オーバードーズ依存症』(晶文社、

二〇〇一)、佐々木央『未来なんか見えない——自傷する若者たち』(共同通信社、二〇〇二)。

(27) ネットのこの側面は、必ずしもこれまで十分に評価されてきていないように思われる。私自身は、短いエッセーの形で論じたことがある。拙稿「インターネットは何をもたらすか」(『在家仏教』二〇〇一年五月号)。それらの弱者は、人格障害者・性同一性障害者・難病者・不登校者・風俗産業従事者など、表社会で団結して自己を表現しにくい人々を含む。

(28) 「南条あやの保護室」による。

(29) 「南条あや略歴」(『卒業式まで死にません』所収)参照。

(30) 南条『卒業式まで死にません』、一八四頁。

(31) 今日、父と息子のあいだにエディプスコンプレックスがなくなっており、それとともに父娘関係が困難になっていることが指摘されている。香山りか『ぷちナショナリズム症候群』(中公新書ラクレ、二〇〇三)第二章。少子化やパラサイト現象とも関係するものであろう。南条は日記の中でしばしば父親をののしりながらも、門限を守る「いい子」でもあった。

(32) 南条『卒業式まで死にません』、一九二頁。

(33) 同、一九三頁。

(34) 同、二一三頁。

(35) 同、一二頁。

(36) 山田花子『自殺直前日記』(太田出版、一九九六)、二四頁。

(37) サイト「南条あやの保護室」の入院レポート九月三〇日。

(38) 拙稿「〈人間〉の言葉、死者の言葉」(『日本の哲学』四、二〇〇三予定)。

(39) サイトはしばしば消え、また新たに生まれる。二〇〇三年九月には、中瀬ゆい「たまごや—リストカット中学生」(http://tamagoya.ne.jp/mm/yui/)のメルマガが創刊されている。

(すえき・ふみひこ　東京大学大学院人文社会系研究科教授)

An Essay on Suicide: In Memory of Nanjô Aya (1980-1999)

Fumihiko Sueki

In this essay, I would like to examine some ideas on suicide of young people in recent Japan on the basis of some books, comics and web sites.

1. The comic *Himizu* by Furuya Minoru published in 2001-2002 is a story of a boy of fifteen who killed his father and committed suicide. He was stoic and moralistic but had a feeling of deviation from normal life. The boundaries between a normal life and deviation from it became ambiguous in recent Japan. This would be a reason why the number of those who feel they are deviant from normality is increasing.
2. The *Perfect Manual of Suicide* (Kanzen Jisatsu Manual) by Tsurumi Wataru has been a bible of suicide since its publication in 1993. It is a book of challenge to the tiresome world full of hypocrisy. The extinction of the Soviet Union in 1991 made political activities for an ideal world vain and the crime of Aum Shinrikyô in 1995 made religious activities questionable. A sociologist Miyadai Shinji characterized the Japanese society after the crime of Aum Shinrikyô as endless day-to-dayness. This is the situation which made the *Perfect Manual of Suicid*e popular.
3. Nanjô Aya (1980-1999) was a high school student who committed suicide in 1999. She was a habitual wrist cutter and was addicted to psychomimetic drugs. She became a favorite of the young people who suffered mental disorder when she posted her diary on a web site in 1998. Compared with Takano Etsuko who committed suicide because of despair after the defeat of a political struggle in 1969, the suicide of Nanjô seems to be a typical case of the time of endless day-to-dayness when the boundaries between normality and deviation from it became ambiguous.